

前回、2章43節から47節を通して、最初のエルサレムのキリスト教会について学んだ。その中の43節「使徒たちによって多くの不思議な業とするしが行われていた」とあったその一例が、今日の3章1節から10節までに、使徒ペトロとヨハネの業として出てくる。また、2章46節の「毎日ひたすら心を一つにして神殿に参って」いたとあったが、その神殿における出来事でもある。

このような出来事から始まる3章から4章31節までは、生まれたばかりのエルサレムのキリスト教会に対するユダヤ教のサドガイ派からの、つまり神殿を中心とするユダヤ教からの迫害の記事である。

今日の3章1節から10節のところは、そのきっかけとなった神殿におけるいやしの業が、そして11節から26節までは、神殿でしたペトロの説教が、続けて4章1節から22節までは、ユダヤ教議会によるペトロとヨハネの逮捕、議場への召喚、そして釈放という一連の出来事が記されている。最後に4章23節から31節までは、釈放された2人を待ち受けていたキリスト教会の祈りと、なおも続ける宣教が綴られている。

1-2節 「ペトロとヨハネが、午後三時の祈りの時に神殿に上って行った。すると、生まれながら足の不自由な男が運ばれて来た。神殿の境内に入る人に施しを乞うため、毎日『美しい門』という神殿の門のそばに置いてもらっていたのである。」

ユダヤ人は1日3度祈る(ダニエル6:11, 14)。その一つが「午後三時の祈り」である(10:3, 30)。ペトロとヨハネもその祈りのために「神殿に上って行った」が、その時「美しい門」という所を通った。この「美しい門」と言われる門は、沢山ある神殿の門の中でどの門を指しているのかは分からない。

1、2節に出てくる「神殿」、「神殿の境内」、そして3節と8節の「境内」は、原文では全部同じで「聖域」という言葉(ἱερόν, ヒエロン)である。

「生まれながら足の不自由な男」、そのために担いで来て「運んで」もらわないとこの門に来られなかった「男」は、4章22節によると、「40歳を過ぎていた」という中年の男である。彼は、「神殿の境内に入る人に施しを乞う」毎日を送っていた。

ユダヤ教では神様への祈りと人への施しというのはセットになっていた(例えば、この先の10章2節、4節)。そこで、神殿の境内に入る人に「施しを乞う」のは非常に効果的だったのではないかと思われる。

3-8節

「彼はペトロとヨハネが境内に入ろうとするのを見て、施しを乞うた。ペトロはヨハネと一緒に彼をじっと見て、『わたしたちを見なさい』と言った。その男が、何かもらえると思って — 「期待して」という言葉 — 二人を見つめていると、ペトロは言った。『わたしには金や銀はないが、持っているものをあげよう。ナザレの人イエス・キリストの名によって立ち上がり、歩きなさい。』そして、右手を取って彼を立ち上がらせた。すると、たちまち、その男は足やくるぶしがしっかりして、躍り上がって立ち、歩き出した。そして、歩き回ったり躍ったりして神を賛美し、二人と一緒に境内に入って行った。」

ここでは、アイ・コンタクト、目と目の合うふれあいがこの男と使徒たちとの間に起こったということがよく分かる。まず、男が「ペトロとヨハネを見る」。すると、ペトロとヨハネが「彼をじっと見る」。そればかりか「わたしたちを見なさい」と促すので、男は「二人を見つめている」と、こういう両者の目が非常にしっかりと向き合ったという感じがある。

7節と8節は、この40年間生まれてから一度も歩いたことのない男が歩けるようになった喜びが、目に見えるように描かれている。「躍り上がって立ち、歩き出した。そして、歩き回ったり踊ったりして神を賛美し、二人と一緒に境内に入って行った」。

9-10節は、これが神殿の民衆に与えた影響を記している。

「民衆は皆、彼が歩き回り、神を賛美しているのを見た。彼らは、それが神殿の『美しい門』のそばに座って施しを乞うていた者だと気づき、その身に起こったことに我を忘れるほど驚いた。」

奇跡を見て「驚いた」というのは、ルカによる福音書でもたびたび主イエスのなされた御業に民衆が示した反応である。「我を忘れる、(ἐκστάσεως、エクスタセオース。エクスタシーに陥るほど)」「驚いた」と言われている。

この出来事の意味については、これから後11節以下に使徒ペトロの説教が詳しく説明している。ここでは、4章22節でこの出来事を「このしるし」と呼んでいるところに注目し、この出来事それ自体が、どういう「しるし」として、どういう意味を指差していたのかを考えてみることにする。

この出来事は何の「しるし」だったのか。それは、恐らく、イザヤ書35章の実現が起こったということであろう。イザヤ書35章4-6節には次のような言葉がある。2節から引用する。

「2. 人々は主の栄光と我らの神の輝きを見る。3. 弱った手に力を込め、よろめく膝を強くせよ。4. 心おののく人々に言え。『雄々しくあれ、恐れるな。見よ、あなた

たちの神を。敵を打ち、悪に報いる神が来られる。神は来て、あなたたちを救われる。』5. そのとき、見えない人の目が開き、聞こえない人の耳が開く。6. そのとき歩けなかった人が鹿のように躍り上がる。口の利けなかった人が喜び歌う。荒れ野に水が湧きいで荒れ地に川が流れる。

「**躍り上がる**」(ἀλλόμενος、ハルロメノス)。この言葉は、使徒言行録の今日のところの8節で2度も「**躍り上がって立ち**」、「**歩き回ったり踊ったりした**」というふうにこの言葉を強調している。イザヤ書35章の約束していた救いの神が来た、これを訴えているかのようなのである。この時、イザヤ書35章3節「**弱った手**」「**よろめく膝**」、4節「**心おののく人々**」、5節「**見えない人**」「**聞こえない人**」、6節「**歩けなかった人**」「**口の利けなかった人**」、こういう人々が救いを見る。

では、主なる神はどのように来られたのか、たとえば、「**ナザレの人イエス・キリスト**」において来られたのだ。これが新約聖書のメッセージである。

主イエスは、十字架につけられる前に、ルカによる福音書7章に22、23節で、このイザヤ書35章を引用しながら宣言なさった。

「**それで、二人にこうお答えになった。『行って、見聞きしたことをヨハネに伝えなさい。目の見えない人は見え、足の不自由な人は歩き、重い皮膚病を患っている人は清くなり、耳の聞こえない人は聞こえ、死者は生き返り、貧しい人は福音を告げ知らされている。わたしにつまずかない人は幸いである。』**」

このようにご自分のお働きをイザヤ書35章の成就という形で語られたのである。そして実際、例えばヨハネによる福音書の中で、ベトザタの池のほとりで主イエスは足の利かない人を立ち上がらせた、そういう御業も伝えられている(5:8-9)。

また、ルカによる福音書5章23、24節には、中風の人に向けて「**起き上がり、床を担いで家に帰りなさい**」と言って立ち上がらせたことが記されている。この時の「**起きて歩け**」という言葉が、文字通りそのまま今日のペトロのセリフと全く同じである。

以上で分かるように、主イエスが十字架に架かる前に、イザヤ書35章の実現がわたしの活動において来ていると言われ、そしてその一つの例として本当に足の動かない人を「**起きて歩け**」と言って歩かせた御業が、主イエスが昇天された今、シモン・ペトロの口を通して全く同じ「**起きて歩け**」と言って実現した。それが今日の「**しるし**」であると、言ってよいだろう。

では、「**ナザレの人イエス・キリスト**」が行っておられたイスラエルの神の救いの御業が、なぜ今ペトロやヨハネの手を通して行われているのか。その答えは、「**ナザレの人イエス・キリストの名によって**」という言葉に籠められている。このフル・ネ

ームの「名」は、この物語にだけ2度出てくる(3:6、4:12)。

迫害物語においては、この「イエスの名」というのが非常に重要なものとして出てくる(16節、4:7, 10, 12, 17-18, 30など)。このように、「イエスの名」というのが実はこのくだりのキーワードになっている。

このことを理解するためには、この奇跡が行われたのが「神殿」であるということに注意したい。エルサレム神殿を建てた時、ソロモン王は列王記上8章29節で次のように言っている。

「そして、夜も昼もこの神殿に、この所に御目を注いでください。ここはあなたが、『わたしの名をとどめる』と仰せになったところです。」

また、申命記12章5節にはこうある。

「必ず、あなたたちの神、主がその名を置くために全部族の中から選ばれる場所、すなわち主の住まい—これは『名前のすまい』という意—を尋ね、そこへ行きなさい。」

今、「神殿」で、主なる神のお名前に代わって「イエスの名」が立って歩かせるということを始めた。地上におられるとき主イエスがなさったと同じことを、「イエスの名」が続行しておられる。昇天し人の世からいなくなったはずの主イエスが、「イエスの名」という形で御業を続けておられる、こういうことを告げているのだと思われる。

この先9章34節にいくと、ペトロは、今度はアイネアという中風で歩けない人に向かって「アイネア、イエス・キリストがいやして下さる。起きなさい。自分で床を整えなさい」、そう言ってアイネアをすぐに立ち上がらせる。ここでは、「イエスの名」などという言い方ではなくて、「イエス・キリスト(御自身)がいやして下さる」のだという、そこまではっきりと、昇天された主イエスが今もなお御業を続けられるという信仰が確立していることが分かる(マタイ28:20、マルコ16:20、結び二参照)

「名」というのは、その人、その人格を表すものである。「イエスの名」とい形で、主イエスは今も生きておられるということを知らせようとする、そういう「しるし」である、今日の箇所が出来事は。

*聖書研究祈祷会は、次回(12月8日)を今年の最後の回とします。

コロナの第8波の入り口にあるこの時期、体調を整えながら、教会学校(CS・JC)のクリスマス礼拝と祝会(18日)、イヴ礼拝(24日、土曜)、クリスマス礼拝(25日)を迎えるようにいたしましょう。

上記礼拝の為に祈りを願います。